

東日本大震災で被害を受けた明治の石橋「常磐橋」の修復が終わりました。2つの美しいアーチと文明開化期のモダンな外観が特徴の橋ですが、本号では、その作り方や歴史など裏側から魅力に迫ります。

お見せします！都内最古の石橋の裏

東京駅からほど近く。再開発なども進む日本有数のビジネス街を通る日本橋川に架かる国指定史跡常磐橋門跡内「常磐橋(ときわばし)」が、修復工事を終え、5月上旬から通行できるようになります。

常磐橋は1877年(明治10年)に木橋から架け替えられた石橋で、都内に残る石橋としては庭園にあるものを除きもっとも古いものといわれています。しかし、東日本大震災により橋の積石が歪み、崩落の危険が生じたため、区は修復工事を行いました。区の土木工事部門が国指定文化財の修復工事を実施するのは初めてのこと。通常の道路や橋梁と違い、機能性・安全性の向上だけでなく、その復元や文化的価値の保全も必要となるため、工事は困難を極めました。必要な作業や手続きが一般的な工事と大きく異なり、思うようにスケジュールが把握できず、担当者の間でも戸惑いがありました。しかし、完成した橋の美しいアーチを見ていただければ、その価値がきっと分かるはず。今号では、この工事を通じて常磐橋の「裏側」を知っていただくとともに、橋の魅力と歴史について迫ります。

常磐橋

Contents ー今号の主な内容ー

7 区民交通傷害保険がはじまります 8 災害に備えて 帰宅困難者受入協定、物資・車両提供の協定締結 15 食の多様性を学ぶ動画を配信中



1

1 復元された常磐橋



2

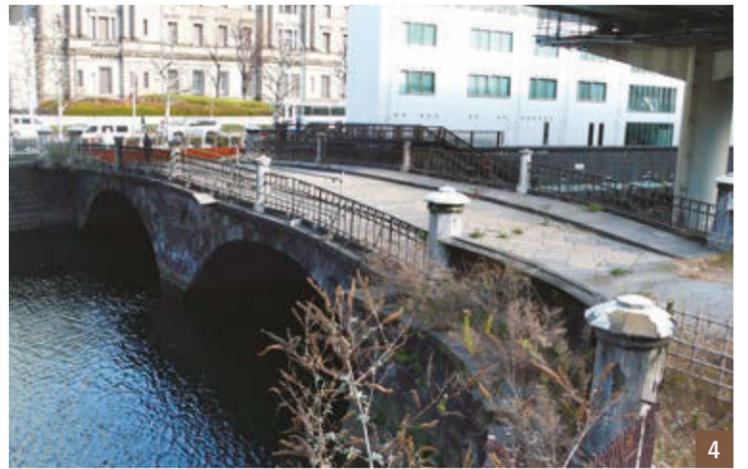
2 道路公園課の坂牧さん(左)と地域まちづくり課の永野さん(右・道路公園課所属時には工事を7年担当)

3 親柱の原石は茨城県から取り寄せた

4 解体前の橋。平成24年2月2日撮影



3



4

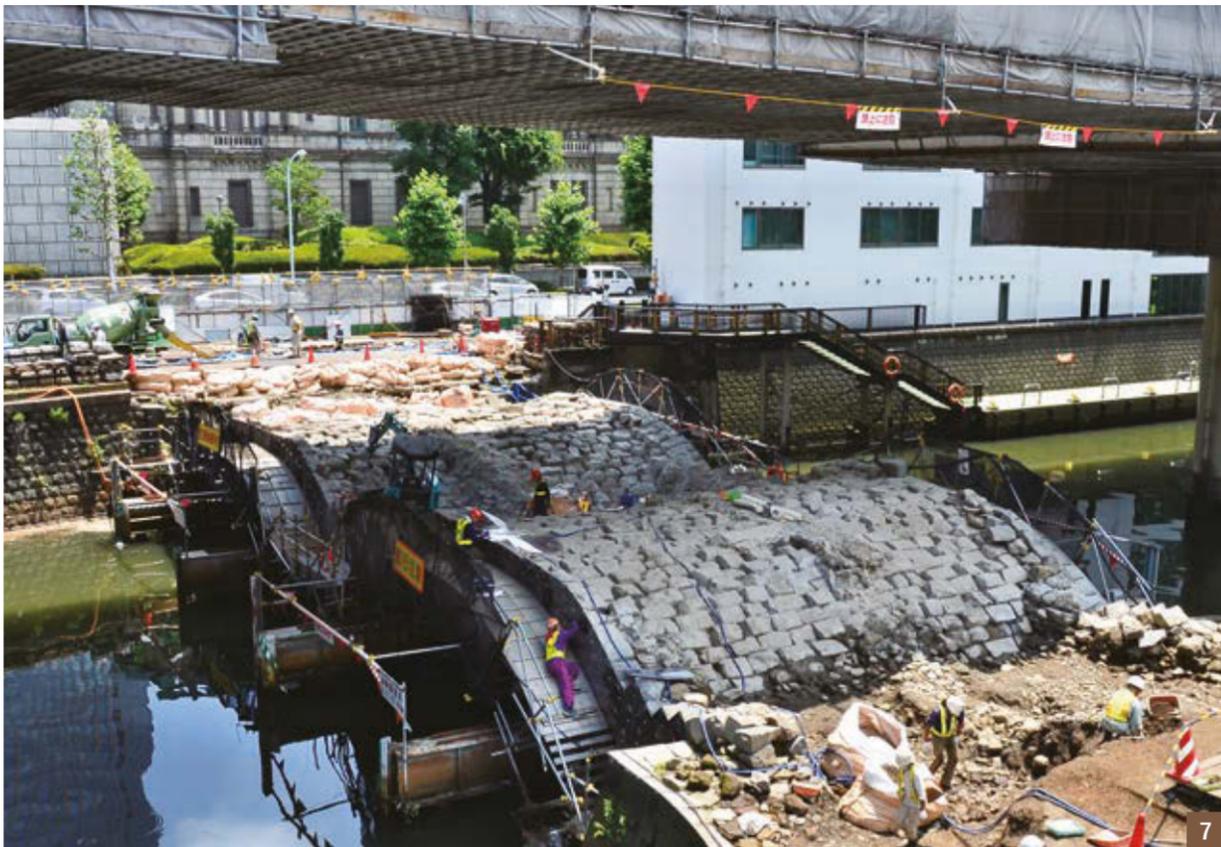
文明開化期から現代へ想いを橋渡し 常磐橋を築造時の姿に復元。

3つの橋をかかえる、
「ときわばし」エリア。

常磐橋修復に
込められたもの。

今回の工事は、東日本大震災の揺れで被災した橋を修復するものですが、実は常磐橋が地震の被害にあうのはこれが初めてではありません。1923年(大正12年)に発生した関東大震災により、大きな被害を受けたのです。その後、1926年(同15年)に関東大震災の復興事業として約50メートル南にコンクリート製の頑強な常「盤」橋(ときわばし)が完成しました。さらに、1988年(昭和63年)には常磐橋から、北へ約50メートルの位置に、鋼製の新常磐橋が架けられました。今回修復した一番古い常磐橋を含めて、このエリアには「ときわばし」を冠する橋が3つあるということになります。また、このエリアでは再開発も進んでおり、高さ390メートルの「Tower Tower(トーチタワー)」の建設も予定されています。まさに、文化と都市が融合する千代田区を象徴するエリアといえます。

関東大震災で大きな被害を受けたのち、常磐橋は長い間、修理されずに放置されていましたが、1933年(昭和8年)、復興事業の一環として常磐橋公園が開園し、1934年(同9年)に常磐橋の修復工事も実施されることになりました。復興事業に尽力したのは、新一万円札の肖像や大河ドラマでも話題の実業家・渋沢栄一です。震災当時83歳だった渋沢は、都市部が受けた壊滅的な被害に心を痛め、震災救護や復興事業を積極的に進めました。残念ながら、渋沢自身は1931年(昭和6年)に逝去していますので、修復された常磐橋を見ることはできなかったのですが、経済産業や社会事業などのさらなる発展を願った渋沢の遺志を継ぐ「渋沢青淵翁記念会」の多額の寄付により、常磐橋一帯は復興を遂げたといえます。常磐橋はそうした先人の努力が込められてきた貴重な史跡でもある橋です。



「石一つも文化財」。 常磐橋修復工事の内容。

今回の工事では、修復（破損など部分の修理）・補強（災害への対策）・復元（建設当時の姿へ）・整備（照明整備など）の4つを事業の柱としました。

担当者の言葉で特に心に残っているのが「石一つも文化財」というものです。取り外す石はあらかじめ番付したうえで解体し、積み方などを記録（写真6・8・調書作成）し、修理して使える部材はできるだけ再利用し、復元時に元通りに積みなおすという膨大な作業を行いました。その際、石の形が不揃いでも、その一つひとつが文化財であるため、修理して使える石はできるだけ再利用し、新しい石材を使うようになった箇所でもすべて廃棄せずに、それより小さい部材に再加工するなどしました。なお、一部を除いて橋に使われている石は備前岡山藩主・池田光政らによって築かれた江戸城小石川門の石垣の再利用と判明しました。そのため、新しい石材が必要なきは、同じ地域から石を調達するなど産地にこだわりました。

現代の土木工事では鋼やコンク

リートを用いた橋の工事が基本ですが、今回のように空積み技術を用いた石橋の工事は、千代田区では初めてのことで。石を一つひとつ積んで仮組み、確認するという作業。しかも、ほとんど手作業（写真5・7）です。うまくいくまで何度も積み直しを行い、半年近くも費やしました。また、前述した関東大震災後の昭和の修理で栗石をコンクリートで固めてあったため、解体が困難でした。この教訓から、今回の工事では将来的にまた修理をしようとしたときに、石材の取り外しができるように、石の表面に和紙を吹き付け、石同士を縁切りし、後世の補修にも気をつけました。

意匠についてもどの時代のデザインを生かすか、多くの議論が交わされました。単に明治の建設時代に修復・復元するだけでなく、関東大震災時の修復の痕跡（写真10）を残し、史跡としての価値を継承する工夫もされています。

史跡工事には許認可・調整などのさまざまな手続きや専門家からの意見聴取も必要です。それぞれの現場では工事担当者、施工主、石工職人、文化財担当者など工事に関わったすべての人がお互いの意見をぶつけ合

いました。完成した常磐橋を見る際は、細部にもぜひ注目し、作り手の苦労にも想いを馳せてみてください。

修復を終えて。

「3月11日に東日本大震災の発生から10年目の節目を迎えた今、常磐橋が無事修復できたことに大きな意味を感じます。また、管理者として安全な橋を作るという使命を果たすとともに、文化財の価値も守りながら完成できたことが良かったです」と、工事担当者は満足げに話します。修復に携わった多くの人は、常磐橋の歴史的価値だけでなく、明治に石橋を架けた人、関東大震災から復興させた人の想いも紡いでいったのかもかもしれません。

文明開化期を象徴する国指定史跡の「常磐橋」。明治維新、関東大震災、首都高速道路の開通、東日本大震災など、その景観は時代を反映して移り変わってきました。近い将来、頭上を走る首都高速道路は地下化される計画となっており、再開発を控えたこのエリアからますます目が離せません。さまざまな歴史が詰まった常磐橋を、令和の今、渡ってみませんか。

Tokiwabashi Bridge

5つの時代をこえた常磐橋!

二つの美しいアーチが特徴の石橋「常磐橋」。明治から令和まで5つの時代にかけて、多くの方がその上を行き交いました。今回の工事で取り戻した明治時代のモダンな姿を味わいつつ、歴史に想いを馳せてみませんか?

いち早く歩車分離が取り入れられた路面も再現!

常磐橋

常盤橋公園

日本橋川

トーチタワー建設地

東京駅

常盤橋公園内には、関東大震災後に常磐橋再建に尽くした渋沢栄一像も、通りを行き交う会社員を見つめます。

日本のビジネス街で文明開化の風を感じつつ、優雅なお散歩を☆

イラスト:川瀬ホシナ

時代を駆ける橋 千代田探訪 常磐橋編



常磐橋からは東京駅もすぐそば! 近くでは高さ390mの「Torch Tower (トーチタワー)」も建設中。このエリアでは近代と最先端を同時に感じられます。

東京駅前常盤橋プロジェクト「TOKYO TORCH」

2021年6月に常盤橋タワー(高さ212m)、2027年度にTorch Tower(高さ390m)が竣工予定。

広場や商業施設なども充実し、ますます目が離せないエリアに!

常磐橋の歴史と価値

橋と歴史を未来に伝えたい
常磐橋とともに、発掘調査などから分かった当時の技術などの歴史を、今後の展示などを通じて未来に伝えていきたいです。



日比谷図書文化館 文化財事務室 学芸員 篠原杏奈さん(左)、相場峻さん(右)

今回修理した石橋の中には、路面に見える歩車道分離帯や、唐草のような手摺柵など、デザインとして橋の歴史が体験できるポイントがあります。これらは古写真や資料などを頼りに復元に成功したものです。橋を渡る際には、ぜひ両岸からの眺めを楽しんでみてください。明治東京の玄関口に架けられた文明開化の華やかな石橋が、令和東京の玄関口にタイムスリップしてき

たように見えるはず。江戸時代に木橋だったときの様子は、これまで数枚の古写真しか手がかりがありませんでしたが、今回石橋の修理をする中で遺構がみつきり、初めて発掘調査を行うことができました。また、明治期に架けられた石橋についても、捨土台や胴木、松杭などが多数みつきり、橋を架けた当時の技術をうかがい知ることができました。修理された橋とともに新たに分かった歴史も、今後の展示などを通じて未来に伝えていきたいです。

史跡常盤橋門跡は、江戸城に関連する区内の3つの史跡(ほかに江戸城跡、江戸城外堀跡)の中で最も早くに指定された史跡です。現在は東京駅八重洲口をすぐそばに臨む場所に位置していますが、江戸時代当時には江戸城大手門筋を指す場合の外堀の正門だった場所ですので、今も昔も江戸・東京の街の玄関という役割を担った場所といってもよいかもしれません。



▲昭和31年(1956年)頃の様子 [写真提供: 中央区立京橋図書館]



▲常磐橋右岸の地下遺構

※広報千代田では区民の皆さんの表情をご紹介しますため、飛沫防止に努めたうえで、マスク無しの写真も撮影・掲載させていただきます